

**保護上重要な  
脊椎動物**



# 哺乳類

## ① 千葉県陸生哺乳類の概要

現在、日本列島に生息する在来哺乳類の種数は23科107種（クジラ類、ジュゴン等の41種と比較的近い過去に絶滅した3種を除く）、外来種を含めると31科134種と言われている（阿部，2005）。このうち千葉県に生息する陸生哺乳類は、在来種11科22種、外来種を含めると15科34種である（近年の絶滅後に移入されたと考えられるイノシシを外来種とする：表1）。したがって、陸生哺乳類に関して言えば、千葉県では日本の生息種の25%が生息していることとなる。千葉県で生息している陸生哺乳類の種数は、野生状態のイヌ、ネコを含めた場合、以前には33種とされており（落合，2002a, 2004）、今回の生息種リストでは1種が増えた。この1種はヒナコウモリであり、2002年に市川市で初めて確認されて以降、これまで県内で4例が記録されている（詳細はヒナコウモリの項目にて記述）。

千葉県の近隣都県における陸生哺乳類の生息種数を見てみると、茨城県が32種（山崎ほか，2001）、東京都が51種（東京都環境保全局，1998）、埼玉県が54種（埼玉県，2002）である。千葉県の34種は、茨城県とほぼ同等であり、東京都や埼玉県と比べるとやや少ない。これは、主に次に示す3つの理由によると考えられる。

1) 千葉県の山は標高が低く、南房総市の愛宕山（標高408.2m）が最高峰である。関東周辺地域では高標高地にトガリネズミ類、ヒメヒミズ、

ヤチネズミ、モモンガ、ヤマネ、オコジョなどがあるが、千葉県ではこれらの種が生息していない。

2) 千葉県の山は他の山塊から孤立しており、ツキノワグマやニホンカモシカといった森林性の大型種が千葉県では生息していない。

3) モリアブラコウモリ、カグヤコウモリ、コテングコウモリなど森林性のコウモリ類の生息が千葉県では確認されていない。

千葉県は南部に房総丘陵が、北部に下総台地がそれぞれ広がっている。豊かな自然は県南部の房総丘陵に多く残っているため、ニホンジカ、ニホンザル、ニホンテンといった森林性の種の分布は県南部に限られる。また、ヒミズ、ヒメネズミ、ニホンリス、ニホンアナグマなどは県北部での生息環境が悪化し、県南部に偏在した生息状況となっている。さらに、洞穴性のコウモリ類の分布も県南部に偏っている。

現在、日本各地で野生動物に関する問題が生じている。それは、1) 希少種の保護問題、2) 普通種による農林業への被害問題、3) 外来種が引き起こす問題、の3つに大別される。千葉県でも同様にこの3つのことが現在、問題となっている。すなわち、1) モモジロコウモリやアカギツネといった希少種の保護問題、2) ニホンザル、ニホンジカといった普通種による被害問題、3) アカゲザル、アライグマ、ハクビシン、キョン、イノシシといった外来種の問題、である。

## ② 選定・評価基準の概要

検討対象種は、千葉県で現在生息が確認されているか、明治時代以降に県内に生息していた記録がある在来の陸生哺乳類とした。ただし、海生哺乳類のうち、沿岸域にかつて生息していたニホンアシカと現在生息しているスナメリを含めた。

千葉県では、2000年に千葉県版レッドデータブックの動物編が刊行され（千葉県，2000）、2006年に動物編のレッドリストが改訂された（千葉県環境生活部自然保護課，2006）。哺乳類に関しては2006年の改訂の際にカテゴリー基準の再検討を行った。その結果、「千葉県版レッドデータブック共通評価基準及びカテゴリー」に加え、環境省のレッドデータブックカテゴリー定義を参考とした定量的要件・定性的要件を補足基

準として用いることとした（千葉県環境生活部自然保護課，2006）。今回の改訂では、2006年版と同一の時間軸・基本的な考え方（表2）とカテゴリー基準の補助基準（表3）に基づいて選定・評価を行った。カテゴリー基準の補助基準は下記に従って用いた。

・定性的要件として、「千葉県版レッドデータブック共通評価基準及びカテゴリー」を使用するとともに、環境省の1997年版・2007年版のカテゴリー定義（[http://www.biodic.go.jp/rdb/rdb\\_top.html](http://www.biodic.go.jp/rdb/rdb_top.html)）を参考とした。

・定量的要件として、環境省の1997年版・2007年版カテゴリー定義を参考とし、現在個体数、および個体数ないし分布面積の減少率に基

づく基準を使用した。

・評価にあたっては、定量的要件を満たすデータが得られている場合は定量的要件を使用した。ただし、多くの種において定量的要件を満たす

データは得られていない。その場合、定量的要件は目安ないしイメージとして考慮し、基本的には定量的要件に基づいてカテゴリ評価を行った。

表1 千葉県産陸生哺乳類の生息種リスト(2011年現在：34種)

目名	科名	和名	学名	千葉県レッドデータブックのカテゴリ*	外来種**		
食虫目	トガリネズミ科	ニホンジネズミ	<i>Crocidura dsinezumi</i> (Temminck, 1842)	D			
		モグラ科	ヒミズ	<i>Urotrichus talpoides</i> Temminck, 1841	D		
		アズマモグラ	<i>Mogera imaizumii</i> (Kuroda, 1957)				
翼手目	キクガシラコウモリ科	キクガシラコウモリ	<i>Rhinolophus ferrumequinum</i> (Schreber, 1774)	C			
		コキクガシラコウモリ	<i>Rhinolophus cornutus</i> Temminck, 1835	C			
	ヒナコウモリ科	アブラコウモリ	<i>Pipistrellus abramus</i> (Temminck, 1838)				
		ヒナコウモリ	<i>Vespertilio sinensis</i> (Peters, 1880)	情報不足			
		モモジロコウモリ	<i>Myotis macrodactylus</i> (Temminck, 1840)	B			
		ユビナガコウモリ	<i>Miniopterus fuliginosus</i> (Hodgson, 1835)	D			
霊長目	オナガザル科	ニホンザル	<i>Macaca fuscata</i> (Blyth, 1875)	C			
		アカゲザル	<i>Macaca mulatta</i> (Zimmermann, 1780)		○		
齧歯目	ネズミ科	マスカラット	<i>Ondatra zibethicus</i> (Linnaeus, 1766)		○		
		ハタネズミ	<i>Microtus montebelli</i> (Milne-Edwards, 1872)				
		カヤネズミ	<i>Micromys minutus</i> (Pallas, 1771)	D			
		アカネズミ	<i>Apodemus speciosus</i> (Temminck, 1844)				
		ヒメネズミ	<i>Apodemus argenteus</i> (Temminck, 1844)	D			
		ドブネズミ	<i>Rattus norvegicus</i> (Berkenhout, 1769)		○		
		クマネズミ	<i>Rattus rattus</i> (Linnaeus, 1758)		○		
		ハツカネズミ	<i>Mus musculus</i> Linnaeus, 1758		○		
		リス科	ニホンリス	<i>Sciurus lis</i> Temminck, 1844	C		
		兔目	ウサギ科	ニホンノウサギ	<i>Lepus brachyurus</i> Temminck, 1845		
				アナウサギ	<i>Oryctolagus cuniculus</i> (Linnaeus, 1758)		○
食肉目	イヌ科	アカギツネ	<i>Vulpes vulpes</i> (Linnaeus, 1758)	B			
		タヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides</i> (Gray, 1834)				
		イヌ	<i>Canis familiaris</i> (Linnaeus, 1758)		○		
	アライグマ科	アライグマ	<i>Procyon lotor</i> (Linnaeus, 1758)		○		
	ネコ科	ネコ	<i>Felis catus</i> (Linnaeus, 1758)		○		
		イタチ科	ニホンイタチ	<i>Mustela itatsi</i> Temminck, 1844			
			ニホンテン	<i>Martes melampus</i> (Wagner, 1840)	D		
			ニホンアナグマ	<i>Meles anakuma</i> Temminck, 1844	C		
	ジャコウネコ科	ハクビシン	<i>Paguma larvata</i> (Smith, 1827)		○		
	偶蹄目	シカ科	ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i> Temminck, 1838			
			キョン	<i>Muntiacus reevesi</i> (Ogilby, 1839)		○	
イノシシ科		イノシシ	<i>Sus scrofa</i> Linnaeus, 1758		○***		

\*：本編「千葉県の保護上重要な野生生物－千葉県レッドデータブック－動物編 2011年改訂版」に基づく。

本表で示した他、下記の4種が本編に掲載されている。

・明治時代以降の陸生の絶滅種・消息不明種（カテゴリ-X）として2種（ヤマコウモリ *Nyctalus aviator* Thomas, 1911; カワウソ *Lutra lutra* (Linnaeus, 1758)）

・明治時代以降の海生の絶滅種・消息不明種（カテゴリ-X）として1種（ニホンアシカ *Zalophus japonicus* (Peter, 1866)）

・一般保護生物（カテゴリ-D）の海生の生息種として1種（スナメリ *Neophocaena phocaenoides* (G.Cuvier, 1829)）

\*\*：外来生物法（特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律）に基づく特定外来生物指定種を○で、それ以外の外来種を○で示す。

\*\*\*：戦後に一度絶滅した後の移入個体群と考えられる（千葉県環境生活部自然保護課・房総のシカ調査会, 2001, 2002; 永田・落合, 2009）。

その他の絶滅種・消息不明種

●少なくとも江戸時代までは生息していたと考えられる種

・オオカミ *Canis lupus* Linnaeus, 1758 (落合, 2002a)

●縄文時代の後は確実な生息が確認されていない種

・ムササビ *Petaurista leucogenys* (Temminck, 1827) (落合・繁田, 2010)

表2 哺乳類のレッドリスト作成にあたっての時間軸と基本的な考え方

	2000年版	2006年版・今回改訂版
対象とする絶滅種の時間軸	明治時代以降	明治時代以降
減少を見る時間軸	明記されておらず	過去（今後）10-30年
分布面積のとらえ方	分布面積の広狭を重視した。	分布面積の広狭そのものではなく、分布面積の減少状況を要件とした。
レッドリストのとらえ方	千葉県内の各生息地域の消長を重視した。	千葉県からの絶滅の危険性を重視した。

表3 哺乳類のカテゴリー基準の補助基準

千葉県版レッドデータブック共通評価基準及びカテゴリー	定量的要件（個体数、減少率のどちらか一方でも）		定性的要件	準適用定性的要件（環境省カテゴリー定義）
	(1) 現在個体数	(2) 減少率（個体数ないし分布面積）		
X 消息不明・絶滅生物	明治時代以降に生息していたことが確認・確実であるが、現在の個体数は0と考えられる。	—	千葉県版レッドデータブック共通評価基準及びカテゴリーXのとおり	絶滅
A 最重要保護生物	成熟個体数が50未満	最近10-30年間に80%以上の減少があったと推定される場合、あるいは今後10-30年間に80%以上の減少があると予想される場合	同じく、カテゴリーAのとおり	絶滅危惧IA類
B 重要保護生物	成熟個体数が250未満	最近10-30年間に50%以上の減少があったと推定される場合、あるいは今後10-30年間に50%以上の減少があると予想される場合	同じく、カテゴリーBのとおり	絶滅危惧IB
C 要保護生物	成熟個体数が1000未満	最近10-30年間に20%以上の減少があったと推定される場合、あるいは今後10-30年間に20%以上の減少があると予想される場合	同じく、カテゴリーCのとおり	絶滅危惧II類
D 一般保護生物	—	—	同じく、カテゴリーDのとおり	準絶滅危惧
情報不足	ヒナコウモリはこれまで県内で少数（4例）の記録しか報告されていないため、カテゴリーは「情報不足」とした。			

### ③ 選定・評価結果の概要

評価の結果、18種（陸生16種、海生2種）を選定した。内訳は次のとおりである：消息不明・絶滅生物（X）3種、最重要保護生物（A）0種、重要保護生物（B）2種、要保護生物（C）5種、一般保護生物（D）7種、情報不足1種。

過去2回の千葉県の動物に関するレッドデータブック・レッドリスト（千葉県、2000；千葉県環境生活部自然保護課，2006）でも哺乳類の選定種数は18種であり、変化はなかった。ただし、選定種および評価カテゴリーには若干の変更が認められる。特に、当初の2000年版から前回の2006年版への改訂にあたっては、選定・評価基準の見直しに伴う変更があった（千葉県環境生活部自然保護課，2006）。また、クジラ類のうち沿岸域に生息するスナメリを2006年版よりレッドリストに加えることとした。今回の

選定・評価における2006年版からの変更点は2つある。1点はニホンザルのカテゴリーの変更（D→C）である。ニホンザルは生息数や分布域についての基準ではレッドリストの選定種とならないが、外来種のアカゲザルとの交雑が進行・拡大している状況にあるためカテゴリーを上げた。もう1点はニホンアナグマのカテゴリーの変更（D→C）である。ニホンアナグマは2006年の改訂で選定・評価基準の再検討に伴いカテゴリーをC→Dに下げたが、県北部における分布域の縮小が著しいと考えられたため、今回、カテゴリーを再びCに変更した。

## ④ 選定・評価における協力者

相澤敬吾（主に霊長目）、藍澤正宏（主に海生哺乳類）、秋田 毅（主に食虫目・齧歯目）、浅田正彦（全体）、池田文隆（主に霊長目）、大藪 健（主に翼手目）、川本 芳（主に霊長目）、黒江美沙子（主に齧歯目）、繁田真由美（全体、特に翼手目・齧歯目）、白井 啓（主に霊長目）、直井洋司（主

に霊長目）、中村光一郎（主に翼手目）、濱中 修（主に食虫目・齧歯目）、羽山伸一（主に霊長目）、古川 淳（主に食虫目・齧歯目）、丸橋珠樹（主に霊長目）、三笠暁子（主に翼手目）、矢竹一穂（主に食虫目・齧歯目）

## ⑤ その他

ア) 哺乳類の和名、学名、種の配列は Ohdachi et al. (2009) に準拠した。

イ) 各種の項目で記されている「国」のレッドリストカテゴリーは環境省の2007年版 ([http://www.biodic.go.jp/rdb/rdb\\_f.html](http://www.biodic.go.jp/rdb/rdb_f.html)) によった。この他、水産庁のレッドリスト（日本水産資源保護協会, 1998）に掲載されている種については、そのリストカテゴリーを「水産庁」として併せて記述した。

ウ) 分布図の表示に用いた生息情報（分布情報）はほとんどが1980年代以降のものであるが、それ以前の情報も一部含まれる。また、今回示した分布図には、現在は生息が確認されなくなっている地点も一部図示されている（例えば、野田、柏、船橋の各市内におけるニホンリスや千葉市内におけるニホンアナグマの分布情報など）。次回、改訂版を作成するには分布情報が得られた時期を2～3期に分けて図示し、分布域の変化が分かるようにすることが望まれる。

エ) 分布図は、筆者が県自然保護課千葉県生物多様性センターに提出した分布情報（文献情報、千葉県立中央博物館の標本記録、筆者および協力者の未公表情報）と県自然保護課千葉県生物多様性センターが取りまとめた分布情報（環境影響評価書をはじめとする文献情報）を合わせて県自然保護課千葉県生物多様性センターが作成したものであり、後者の情報の信頼性について筆者は未確認である。

### 引用文献

阿部 永 (2005) 日本の哺乳類相。「日本の哺乳類改訂版」(阿部 永監修), pp. viii - ix. 東海大学出版会, 秦野市。  
相澤敬吾 (2002) サル目(霊長目)。「千葉県の自然誌 本編6 千葉県の動物1 陸と淡水の動物」(財団法人千葉県史料研究財団編), pp. 893-

896. 千葉県。  
アカゲザル等防除連絡会・千葉県自然保護課 (2010) アカゲザル防除通信 2201号. 2 pp.  
安藤元一 (2008) ニホンカワウソ: 絶滅に学ぶ保全生態学. 235 pp. 東京大学出版会, 東京。  
浅田正彦・立川浩之・高山順子・村田明久・前田喜四雄 (2005) 千葉県におけるヒナコウモリの初記録. 千葉県立中央博物館自然誌研究報告 8: 49-51。  
千葉県 (2000) 千葉県の保護上重要な野生生物ー千葉県レッドデータブックー動物編. 438 pp.  
千葉県 (2007) 特定外来生物(アカゲザル)防除実施計画. 25 pp.  
千葉県 (2008) 第2次千葉県特定鳥獣保護管理計画(ニホンザル). 28 pp.  
千葉県環境生活部自然保護課 (2006) 千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドリスト(動物編) <2006年改訂版>. 36 pp.  
千葉県環境生活部自然保護課・房総のシカ調査会 (2001) 千葉県イノシシ・キョン管理対策調査報告書 1. 95 pp.  
千葉県環境生活部自然保護課・房総のシカ調査会 (2002) 千葉県イノシシ・キョン管理対策調査報告書 2. 97 pp.  
千葉県立大原高等学校生物部 (1985) 夷隅郡におけるコキクガシラコウモリの越冬の生態について。「クラブ誌記念版 COMMUNICATION WITH NATURE」(千葉県立大原高等学校生物部編), pp. 38-53. 千葉県立大原高等学校生物部, 大原町。  
Endo, H. (2009) *Macaca fuscata* (Blyth, 1875). In Ohdachi, S. D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (eds.), The Wild Mammals of Japan, pp. 128-130. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto, and the Mammalogical Society of Japan, Tokyo.  
Fukui, D. (2009a) *Nyctalus aviator* Thomas, 1911. In Ohdachi, S. D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (eds.), The Wild Mammals of Japan, pp. 74-75. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto, and the Mammalogical Society of Japan, Tokyo.  
Fukui, D. (2009b) *Vespertilio sinensis* (Peters, 1880). In Ohdachi, S. D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (eds.), The Wild Mammals of Japan, pp. 91-92.

- Shoukadoh Book Sellers, Kyoto, and the Mammalogical Society of Japan, Tokyo.
- 船越公威・入江照雄 (1982) 九州におけるユビナガコウモリの個体群動態—特に大瀬洞を中心として—。土龍MOGURA (10): 23-34.
- 萩原 光・相澤敬吾・蒲谷 肇・川本 芳 (2003) 房総半島の移入種を含むマカ力属個体群の生息状況と遺伝的特性。霊長類研究 19: 229-241.
- 濱中 修 (1998) 千葉県にすむネズミのなかま。生物分科会だより (57): 4-5. 千葉県高等学校教育研究会理科部会・生物分科会, 千葉市.
- Hata, S., K. Sawabe and Y. Natuhara (2010) A suitable embankment mowing strategy for habitat conservation of the harvest mouse. Landscape and Ecological Engineering 6: 133-142.
- 五十嵐和廣 (2002) ネズミ科。「千葉県の自然誌本編6 千葉県の動物1 陸と淡水の動物」(財団法人千葉県史料研究財団編), pp. 901-908. 千葉県.
- 今泉吉典 (1960) 原色日本哺乳類図鑑. 196 pp. 保育社, 大阪市.
- Ishii, N. (1982) Reproductive activity of the Japanese shrew-mole, *Urotrichus talpoides* Temminck. The Journal of the Mammalogical Society of Japan 9: 25-36.
- Ishii, N. (1993) Size and distribution of home ranges of the Japanese shrew-mole, *Urotrichus talpoides*. The Journal of the Mammalogical Society of Japan 18: 87-98.
- Ishii, N. (2009) *Urotrichus talpoides* Temminck, 1841. In Ohdachi, S. D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (eds.), The Wild Mammals of Japan, pp. 30-31. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto, and the Mammalogical Society of Japan, Tokyo.
- 石井信夫 (2005) ニホンリス。「日本の哺乳類 改訂版」(阿部 永監修), p. 119. 東海大学出版会, 秦野市.
- Isono, T. and T. Inoue (2009) *Zalophus japonicus* (Peter, 1866). In Ohdachi, S. D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (eds.), The Wild Mammals of Japan, pp. 288-289. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto, and the Mammalogical Society of Japan, Tokyo.
- 伊藤徹魯 (1994) ニホンアシカの復元にむけて (7) 古文献の「あしか」の同定。海洋と生物 16: 215-224.
- 伊藤徹魯・中村一恵 (1994) ニホンアシカの復元にむけて (9) ニホンアシカの分布の復元。海洋と生物 16: 373-393.
- Kaneko, Y. (2009) *Meles anakuma* Temminck, 1844. In Ohdachi, S. D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (eds.), The Wild Mammals of Japan, pp. 258-260. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto, and the Mammalogical Society of Japan, Tokyo.
- 金子之史 (2005) ヒメネズミ。「日本の哺乳類 改訂版」(阿部 永監修), P. 138. 東海大学出版会, 秦野市.
- 川本 芳・萩原 光・相澤敬吾 (2004) 房総半島におけるニホンザルとアカゲザルの交雑。霊長類研究 20: 89-95.
- 川本 芳・川本咲江・川合 静・白井 啓・吉田淳久・萩原 光・白鳥大祐・直井洋司 (2007) 房総半島に定着したアカゲザル集団におけるニホンザルとの交雑進行。霊長類研究 23: 81-89.
- 小宮 孟 (1985) 遺跡出土の動物遺骸にもとづく動物分布と生業の復原。千葉県文化財センター研究紀要 (9): 75-178.
- Kuroe, M., N. Yamaguchi, T. Kadoya and T. Miyashita (in press) Matrix heterogeneity affects population size of the harvest mouse: Bayesian estimation of matrix resistance and model validation. Oikos.
- 前田喜四雄 (2005) 翼手目 (コウモリ目)。「日本の哺乳類 改訂版」(阿部 永監修), pp. 25-64. 東海大学出版会, 秦野市.
- Masuda, R. (2009) *Martes melampus* (Wagner, 1840). In Ohdachi, S. D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (eds.), The Wild Mammals of Japan, pp. 250-251. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto, and the Mammalogical Society of Japan, Tokyo.
- 松尾梨加・金城芳典・落合啓二 (2007) 千葉県における食肉目5種の食性比較。千葉県生物誌 57: 73-80.
- 三笠暁子・繁田真由美・浅田正彦・水野昌彦・長岡浩子・相澤敬吾 (2005) 千葉県における洞穴性コウモリ類の生息状況。千葉県立中央博物館自然誌研究報告 8: 17-32.
- Motokawa, M. (2009) *Crocidura dsinezumi* (Temminck, 1842). In Ohdachi, S. D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (eds.), The Wild Mammals of Japan, pp. 22-23. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto, and the Mammalogical Society of Japan, Tokyo.
- 永田純子・落合啓二 (2009) 千葉県における昭和20年代のイノシシ頭骨をもちいた遺伝解析: 近年のイノシシ個体群との比較。野生生物保護 12: 27-31.
- 中村一恵 (2002) 食肉目。「千葉県の自然誌 本編7 千葉県の動物2 海の動物」(財団法人千葉県史料研究財団編), pp. 724-732. 千葉県.
- Nakata, K., T. Saitoh and M. A. Iwasa (2009) *Apodemus argenteus* (Temminck, 1844). In Ohdachi, S. D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (eds.), The Wild Mammals of Japan, pp. 172-173. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto, and the Mammalogical Society of Japan, Tokyo.
- 成田篤彦 (1993) 房総の動物誌. 258 pp. うらべ書房, 木更津市.
- 日本水産資源保護協会 (1998) 日本の希少な野生水生生物に関するデータブック (水産庁編). 437+4 pp. 日本水産資源保護協会, 東京.
- 西垣正男・川道武男 (1996) ニホンリス。「日本動物大百科1 哺乳類I」(川道武男編), pp. 70-73. 平凡社, 東京.
- 西方幸子 (1979) 清澄山におけるヒメネズミ個体群の生態学的研究 I. 生活史と個体数の変動。哺乳動物学雑誌 7: 240-253.
- 落合啓二 (2002a) 哺乳綱。「千葉県の自然誌 本編6 千葉県の動物1 陸と淡水の動物」(財団法人千葉県史料研究財団編), pp. 880-881. 千葉県.
- 落合啓二 (2002b) ネコ目 (食肉目)。「千葉県の

- 自然誌 本編6 千葉県の動物1 陸と淡水の動物」(財団法人千葉県史料研究財団編), pp. 909-920. 千葉県.
- 落合啓二 (2004) 千葉の外来哺乳類. 14 pp. 千葉県立中央博物館, 千葉市.
- 落合啓二・浅田正彦・笠井貞義 (1999) 千葉県におけるキツネの分布. 千葉県立中央博物館自然誌研究報告 5: 109-114.
- 落合啓二・乃一哲久・布留川毅・鈴木藤蔵 (2008) 千葉県南東部における哺乳類のロードキルの状況. 千葉県立中央博物館自然誌研究報告 10: 21-26.
- 落合啓二・繁田真由美 (2010) 千葉県にムササビは生息しているか? 千葉県立中央博物館自然誌研究報告 11: 37-49.
- Ohdachi, S. D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh, eds. (2009) The Wild Mammals of Japan. 544 pp. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto, and the Mammalogical Society of Japan, Tokyo.
- 大藪 健 (1994) 千葉県夷隅郡のコウモリ. コウモリ通信 2(1): 7-9.
- 大藪 健 (2002) コウモリ目(翼手目). 「千葉県の自然誌 本編6 千葉県の動物1 陸と淡水の動物」(財団法人千葉県史料研究財団編), pp. 885-892. 千葉県.
- 埼玉県 (2002) 改訂・埼玉県レッドデータブック 2002 動物編. 257 pp.
- 阪口浩平 (1957) 日本産隠翅類の研究Ⅲ. 日本より未記録の蝙蝠蚤の1種 *Nycteridopsylla galba* Dampf, 1910. 衛生動物 8: 171-173.
- Sano, A. (2009a) *Myotis macrodactylus* (Temminck, 1840). In Ohdachi, S. D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (eds.), The Wild Mammals of Japan, pp. 101-102. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto, and the Mammalogical Society of Japan, Tokyo.
- Sano, A. (2009b) *Rhinolophus ferrumequinum* (Schreber, 1774). In Ohdachi, S. D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (eds.), The Wild Mammals of Japan, pp. 58-59. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto, and the Mammalogical Society of Japan, Tokyo.
- Sano, A. (2009c) *Miniopterus fuliginosus* (Hodgson, 1835). In Ohdachi, S. D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (eds.), The Wild Mammals of Japan, pp. 111-112. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto, and the Mammalogical Society of Japan, Tokyo.
- Sano, A. and N. Armstrong (2009) *Rhinolophus cornutus* Temminck, 1835. In Ohdachi, S. D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (eds.), The Wild Mammals of Japan, pp. 60-61. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto, and the Mammalogical Society of Japan, Tokyo.
- Sasaki, H. (2009) *Lutra lutra* (Linnaeus, 1758). In Ohdachi, S. D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (eds.), The Wild Mammals of Japan, pp. 254-255. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto, and the Mammalogical Society of Japan, Tokyo.
- 澤邊久美子・畠 佐代子・夏原由博 (2005) 堤防植生の刈り取りがカヤネズミ *Micromys minutus* の栄養に与える影響. ランドスケープ研究 68: 571-574.
- 繁田真由美・繁田祐輔・三笠暁子・水野昌彦・浅田正彦 (2005) 千葉県の大規模なぐらにおけるユビナガコウモリ (*Miniopterus fuliginosus*) の個体数変動. 千葉県立中央博物館自然誌研究報告 8: 33-40.
- Shirakihara, K., H. Yoshida, M. Shirakihara and A. Takemura (1992) A questionnaire survey on the distribution of the finless porpoise, *Neophocaena phocaenoides*, in Japanese waters. Marine Mammal Science 8: 160-164.
- Shirakihara, M. and M. Yoshioka (2009) *Neophocaena phocaenoides* (G. Cuvier, 1829). In Ohdachi, S. D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (eds.), The Wild Mammals of Japan, pp. 390-391. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto, and the Mammalogical Society of Japan, Tokyo.
- 白木原美紀 (1996) ネズミイルカとスナメリ. 「日本動物大百科2 哺乳類Ⅱ」(伊沢紘生・粕谷俊雄・川道武男編), pp. 84-85. 平凡社, 東京.
- 鈴木 晃 (1983) 房総半島の孤島性とその文化の研究. 139 pp. トヨタ財団助成研究報告書, 東京.
- Takasaki, H. (1981) Troop size, habitat quality, and home range area in Japanese macaques. Behavioral Ecology and Sociobiology 9: 277-281.
- 東京都環境保全局 (1998) 東京都の保護上重要な野生生物種. 77 pp.
- Uraguchi, K. (2009) *Vulpes vulpes* (Linnaeus, 1758). In Ohdachi, S. D., Y. Ishibashi, M. A. Iwasa and T. Saitoh (eds.), The Wild Mammals of Japan, pp. 214-215. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto, and the Mammalogical Society of Japan, Tokyo.
- 山崎晃司・小柳恭二・辻 明子 (2001) 茨城県でこれまでに確認された哺乳類について. 茨城県自然博物館研究報告 4: 103-108.
- 矢竹一穂 (2002) リス科「千葉県の自然誌 本編6 千葉県の動物1 陸と淡水の動物」(財団法人千葉県史料研究財団編), pp. 899-900. 千葉県.
- 矢竹一穂・田村典子 (2001) ニホンリスの保全ガイドラインづくりに向けて Ⅲ. ニホンリスの保全に関わる生態. 哺乳類科学 41: 149-157.
- 矢竹一穂・秋田 毅・古川 淳・浅田正彦 (2005) 千葉県におけるニホンリス (*Sciurus lis*) の分布状況. 千葉県立中央博物館自然誌研究報告 8: 41-48.
- 矢竹一穂・秋田 毅・古川 淳 (印刷中) 千葉県におけるニホンリス (*Sciurus lis*) の生息状況の変遷. 千葉県立中央博物館自然誌研究報告 11.
- Yoshiyuki, M. (1989) A Systematic Study of the Japanese Chiroptera. 242 pp. National Science Museum, Tokyo.
- Yoshiyuki, M. and H. Endo (2003) Catalogue of Chiropteran Specimens in Spirit. 153 pp. National Science Museum, Tokyo.

**X ヤマコウモリ 翼手目 ヒナコウモリ科***Nyctalus aviator* Thomas, 1911

国：準絶滅危惧 (NT)

千：X-X-X

**【種の特性】** 前腕長57-66mm、頭胴長89-113mm、尾長51-67mm、体重35-60g (前田, 2005)。森林～都市にある樹洞をねぐらとする。飛んでいる昆虫類を食す。夜行性。冬眠する。1産1-2子で、2子が多い。初夏に数十頭から百頭を越すメスだけの集団で出産哺育する (Fukui, 2009a)。

**【分布】** 北海道～九州。中国、朝鮮半島。

**【県内の状況】** 市川市の樹洞で捕獲されたという15頭 (オス10、メス5) を、1956年に国立科学博物館が標本商より入手している (Yoshiyuki, 1989; Yoshiyuki and Endo, 2003)。今泉(1960)に千葉県産10頭の計測値が記されている。阪口(1957)に今泉吉典氏が標本商より入手した千葉県産のヤマコウモリに関する記述がある。後2者の記録は産地が不明であり、市川市の個体と同一であるか不明である。この他に県内での生息情報は得られていない。

**【保護対策】** 今後、生息が確認される可能性がある。生息が確認された場合、ねぐらとしている樹洞を有する樹木の保護と周辺環境の保全が望ましい。

**【引用文献】** Fukui(2009a) / 今泉(1960) / 前田(2005) / 阪口(1957) / Yoshiyuki (1989) / Yoshiyuki and Endo (2003)

**【写真】** 2010年。埼玉県秩父市 / 大沢夕志



(落合啓二)

**X カワウソ 食肉目 イタチ科***Lutra lutra* (Linnaeus, 1758)

国：絶滅危惧 I A 類 (CR)

水産庁：絶滅危惧

千：X-X-X

**【種の特性】** 頭胴長51-77cm、尾長34-49cmであり、体重はオス11.5kg、メス4.5kgが各1例記録されている (Sasaki, 2009)。河川、沿岸域に生息する。主に魚類、エビ・カニ類を食す。夜行性。1産2子。本州以南のものを独立種のニホンカワウソ *L. nippon* とする見解もある (Sasaki, 2009)。

**【分布】** かつては北海道～九州。北海道、本州では1950年代、四国では1979年を最後に生息が確認されておらず、1990年代に日本から絶滅したと考えられる (安藤, 2008)。ヨーロッパ、アジア、北アフリカ。

**【県内の状況】** 太平洋に注ぐ河川流域、利根川流域、東京湾沿岸地域の縄文遺跡より遺骸が出土している (小宮, 1985)。大正～昭和初期のいくつかの郡誌・郷土誌 (市原郡、長生郡、夷隅郡、安房郡、君津郡) に生息すると記されている (落合・繁田, 2010)。聞き取りによれば、1945年に村田川上流 (土気付近) と九十九里町真亀納屋付近、1947年に睦沢村上市場河川脇で生息していたとされる (成田, 1993)。

**【保護対策】** 将来、生息が確認される可能性はないと考えられる。

**【引用文献】** 安藤 (2008) / 小宮 (1985) / 成田 (1993) / 落合・繁田 (2010) / Sasaki (2009)

**【イラスト】** 阿部晴恵



(落合啓二)

## X ニホンアシカ 食肉目 アシカ科

*Zalophus japonicus* (Peter, 1866)

国：絶滅危惧 I A類 (CR)

水産庁：絶滅危惧

千：X-X-X

**【種の特性】** メスよりオスの方が大きい。オスでは体長228-249cm、体重474-514kg。メス（亜成獣）では体長164cmが1例記録されている (Isono and Inoue, 2009)。沿岸域に生息する。魚類、イカ類などを食していたと考えられる。出産期は4-7月で、1産1子。カリフォルニアアシカ *Z. californianus* の亜種 *Z. c. japonicus* とする見解もある (Isono and Inoue, 2009)。

**【分布】** かつては日本沿岸～カムチャツカ半島南端・サハリン南部。38カ所の分布地点が確認されている (伊藤・中村, 1994)。日本海の竹島には1950年代まで数百頭が生息していた。同島における1975年の目撃以降、いずれの地域でも生息が確認されていない (Isono and Inoue, 2009)。

**【県内の状況】** 銚子市海鹿島と鴨川市海瀬島では、1850年代の文献に数十頭ほどが群生していた様子が記されている (伊藤, 1994; 伊藤・中村, 1994)。両島では明治30-40年 (1897-1907年) 頃までに姿を消したと考えられる (伊藤・中村, 1994; 中村, 2002)。

**【保護対策】** 将来、生息が確認される可能性は低いが、房総半島沿岸に来遊・漂着するアシカ類については注意を払う必要がある。

**【引用文献】** Isono and Inoue (2009) / 伊藤 (1994) / 伊藤・中村 (1994) / 中村 (2002)

**【イラスト】** 阿部晴恵

(落合啓二)



## B モモジロコウモリ 翼手目 ヒナコウモリ科

*Myotis macrodactylus* (Temminck, 1840)

国：掲載なし

千：B-B-B

**【種の特性】** 前腕長34-41mm、頭胴長44-63mm、尾長32-45mm、体重5.5-11g (前田, 2005)。洞穴 (自然洞、廃坑、トンネル跡、防空壕跡など) をねぐらとする。飛んでいる昆虫類を食す。夜行性。冬眠する。1産1子。夏に雌雄の混ざった数十～数百頭の出産哺育集団をつくる。洞穴内で他種のコウモリと混ざって集団をつくる (Sano, 2009a)。

**【分布】** 北海道～九州、いくつかの島嶼。シベリア東部、サハリン南部、朝鮮半島。

**【県内の状況】** 1960年前後と1980-1982年に館山市の洞穴で30-50頭ほどが確認されている (鈴木, 1983)。夷隅郡の洞穴で100頭前後の哺育集団が確認され、コキクガシラコウモリとの混生哺育集団、ユビナガコウモリとの混生集団が確認されている (千葉県立大原高等学校生物部, 1985; 大藪, 1994, 2002)。1990-2004年に実施された調査では、洞穴性コウモリの利用ねぐら42カ所のうち11カ所 (県南部8、県央部3) で確認された。1カ所での最大確認頭数は富津市の洞穴での20頭であり、また山武郡の洞穴では幼獣6頭が確認されている (三笠ほか, 2005, この調査には前述の夷隅郡の洞穴は含まれていない)。

**【保護対策】** ねぐらの確認調査、およびねぐらとして利用されている洞穴と周辺環境の保全が望ましい。

**【引用文献】** 千葉県立大原高等学校生物部 (1985) / 前田 (2005) / 三笠ほか (2005) / 大藪 (1994, 2002) / Sano (2009a) / 鈴木 (1983)

**【写真】** 2010年。いすみ市 / 大藪 健

(落合啓二)



モモジロコウモリ

**B アカギツネ 食肉目 イヌ科***Vulpes vulpes* (Linnaeus, 1758)国：掲載なし  
千：B-B-B

**【種の特性】** メスよりオスの方がやや大きい。本州産の亜種 *V. v. japonica* では、頭胴長52-70cm、尾長29-42cm、体重1.9-6.6kg (Uraguchi, 2009)。やぶ、森林、耕作地が混在する生息環境を好む。主に小哺乳類、昆虫類、果実を食す。夜行性だが、日中も活動する。春先に3-5頭の子を出産し、地中に掘った巣穴で育てる。行動圏の面積は100-800ha (Uraguchi, 2009)。

**【分布】** 北海道~九州。北半球に広く分布。

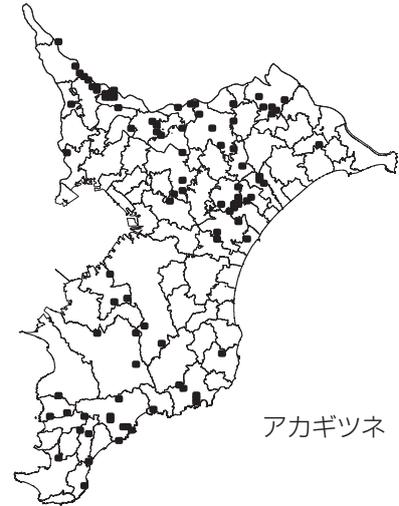
**【県内の状況】** 生息情報は利根川の河川敷、下総台地、県南部の農村地帯など県内広くから得られている (落合ほか, 1999)。中型食肉類の他種と比べて斃死個体の確認数はきわめて少なく (落合ほか, 2008)、千葉県立中央博物館に収蔵されている県内産標本は次の4個体のみである：松尾町産・1987年、東金市産・1987年、白井市産・2002年、成田市産・2006年。第二次世界大戦前後から生息数はさほど多くなく、それが時代の経過とともにさらに減少したと考えられる (落合ほか, 1999)。1999年度より県内での狩猟が禁止されている。千葉県のキツネについては、絶滅地域として示す文献や北海道からの移入があったと記す文献が存在するが、いずれも誤りである (落合, 2002b)。

**【保護対策】** 生息状況の把握、狩猟禁止措置の継続、巣穴を中心とした生息環境の保全が望ましい。

**【引用文献】** 落合 (2002b) / 落合ほか (1999, 2008) / Uraguchi (2009)

**【写真】** 1987年、東金市 / 千葉県立中央博物館所蔵標本

(落合啓二)



アカギツネ

**C キクガシラコウモリ 翼手目 キクガシラコウモリ科***Rhinolophus ferrumequinum* (Schreber, 1774)国：掲載なし  
千：C-C-C

**【種の特性】** 前腕長56-65mm、頭胴長63-82mm、尾長28-45mm、体重17-35g (前田, 2005)。翼を広げると38cmある (大藪, 2002)。洞穴 (自然洞、廃坑、トンネル跡、防空壕跡、地下水路、建物など) をねぐらとする。飛んでいる昆虫類を食す。夜行性。冬眠する。1産1子。夏に10-200頭のメスだけの集団で出産哺育する (Sano, 2009b)。

**【分布】** 北海道~九州、周辺島嶼。ヨーロッパ・北アフリカ~北インド・中国・朝鮮半島。

**【県内の状況】** 県南部の洞穴で比較的よく見られる。県南部での1960年前後と1980-1982年の調査で数百頭の生息が推定されている (鈴木, 1983)。夷隅郡の洞穴で50頭ほどが周年生息し、繁殖もしている (千葉県立大原高等学校生物部, 1985; 大藪, 1994, 2002)。1990-2004年に実施された調査では、洞穴性コウモリの利用ねぐら42カ所のうち22カ所 (県南部19、県央部3) で確認され、うち3カ所で100頭以上が確認された。1カ所での最大確認頭数は富津市の洞穴での約280頭であった。出産哺育に利用された洞穴は5カ所、うち1カ所では数十~100頭以上の幼獣が確認された (三笠ほか, 2005, この調査には前述の夷隅郡の洞穴は含まれていない)。

**【保護対策】** ねぐらとして利用されている洞穴と周辺環境の保全が望ましい。

**【引用文献】** 千葉県立大原高等学校生物部 (1985) / 前田 (2005) / 三笠ほか (2005) / 大藪 (1994, 2002) / Sano (2009b) / 鈴木 (1983)

**【写真】** 1993年、夷隅郡 / 田辺浩明

(落合啓二)



キクガシラコウモリ

## C コキクガシラコウモリ 翼手目 キクガシラコウモリ科

*Rhinolophus cornutus* Temminck, 1835

国：掲載なし  
千：C-C-C

**【種の特性】** 前腕長36-44mm、頭胴長35-50mm、尾長16-26mm、体重4.5-9g（前田，2005）。翼を広げると24cmある（大藪，2002）。洞穴（自然洞、廃坑、トンネル跡、防空壕跡、地下水路など）をめぐらとする。飛んでいる昆虫類を食す。夜行性。冬眠する。1産1子。夏に数十～数百頭のメスだけの集団で出産哺育する（Sano and Armstrong, 2009）。

**【分布】** 北海道～九州、周辺島嶼。

**【県内の状況】** 県南部での調査で、1960年前後と1980-1982年の間に確認頭数が減少した。1980-1982年には館山市の洞穴で数十頭が確認されている（鈴木，1983）。夷隅郡の洞穴で300頭近くが周年生息し、ほぼ同数の幼獣も観察されている（千葉県立大原高等学校生物部，1985；大藪，1994，2002）。1990-2004年に実施された調査では、洞穴性コウモリの利用ねぐら42カ所のうち12カ所（県南部11、県中部1）で確認され、うち3カ所で100頭以上が確認された。1カ所での最大確認頭数は館山市・安房郡の洞穴での約310頭であった（三笠ほか，2005，この調査には前述の夷隅郡の洞穴は含まれていない）。

**【保護対策】** ねぐらとして利用されている洞穴と周辺環境の保全が望ましい。

**【引用文献】** 千葉県立大原高等学校生物部（1985）／前田（2005）／三笠ほか（2005）／大藪（1994，2002）／Sano and Armstrong（2009）／鈴木（1983）

**【写真】** 1994年，夷隅郡／田辺浩明

（落合啓二）



コキクガシラコウモリ

## C ニホンザル 霊長目 オナガザル科

*Macaca fuscata* (Blyth, 1875)

国：北奥羽・北上山系および金華山のホンダザル(*M. f. fuscata*)は絶滅のおそれのある地域個体群(LP)  
千：D-D-C

**【種の特性】** 頭胴長はオス50-60cm、メス48-55cm、尾長は6-13cm（Endo, 2009）。千葉県産の成獣の平均体重は、オス9.6kg、メス6.8kg（相澤，2002）。10頭から150頭を超す群れで森林に暮らす。主に種実、葉、花、芽を食す。昼行性。出産期は春～初夏で、1産1子。群れの遊動域の面積は0.2-27km<sup>2</sup>（Takasaki, 1981）。

**【分布】** 本州～九州、淡路島、屋久島などいくつかの島嶼。

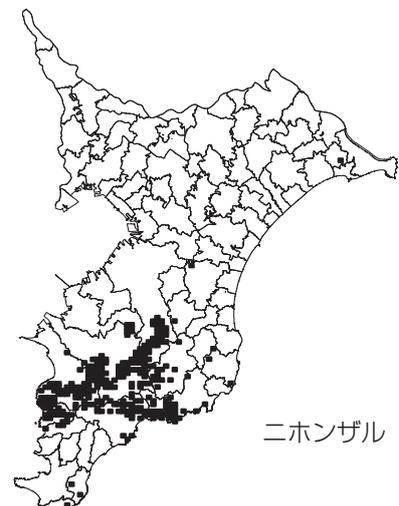
**【県内の状況】** 県南部に87群、4,100頭が生息している（千葉県，2008）。農業被害のため毎年1,000頭前後が捕獲されている。館山市・南房総市でアカゲザル*M. mulatta*が集団で野生化しており（萩原ほか，2003）、そこでニホンザルとの交雑が進んでいる（川本ほか，2004，2007）。房総丘陵のニホンザル群でも交雑個体が確認され（川本ほか，2004）、交雑の拡大が懸念されている。

**【保護対策】** 計画（千葉県，2008）に基づく保護管理と生息環境の保全が望ましい。アカゲザル・交雑個体については計画（千葉県，2007）に基づいて全頭捕獲を目標とする県事業が継続されており、2010年2月までに681頭が捕獲されている（アカゲザル等防除連絡会・千葉県自然保護課，2010）。当事業の継続、およびニホンザル分布域における侵入・交雑の状況把握と捕獲の強化が必要である。

**【引用文献】** 相澤（2002）／アカゲザル等防除連絡会・千葉県自然保護課（2010）／千葉県（2007，2008）／Endo（2009）／萩原ほか（2003）／川本ほか（2004，2007）／Takasaki（1981）

**【写真】** 1983年，富津市／池田文隆

（落合啓二）



ニホンザル

## C ニホンリス 齧歯目 リス科

*Sciurus lis* Temminck, 1844国：中国・九州地方は絶滅のおそれのある地域個体群(LP)  
千：C-C-C

【種の特性】 頭胴長16-22cm、尾長13-17cm、体重250-310g（石井，2005）。自然混交林とマツ林を好む。主に葉、芽、花、種実やキノコ類を食す。昼行性。樹上で活動するが、食物を貯蔵（貯食）するときなどは地上にも下りる。常緑樹の樹上に小枝・樹皮による球状の巣を作る。出産回数は年1-2回で、1産3-6子（西垣・川道，1996）。行動圏の面積はオス約20-30ha、メス約10ha（矢竹・田村，2001）。

【分布】 本州、四国、九州、淡路島では近年の生息記録がない（石井，2005）。

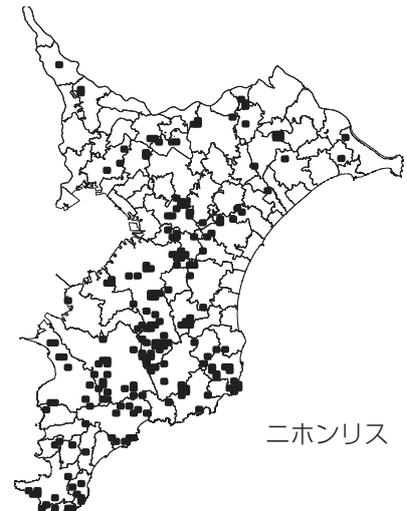
【県内の状況】 県内では年間を通してマツの種子が主要な食物である（矢竹，2002）。県南部では連続的に分布しているが、県北部では生息地点の孤立化・消失が進んでいる（矢竹，2002；矢竹ほか，2005，印刷中）。県北部において2001-2003年に生息が確認された25地点を2009-2010年に再調査したところ、6地点で生息が確認されなくなった（減少率24%）（矢竹ほか，印刷中）。

【保護対策】 特に、分布域が縮小している県北部においてマツ林を含む生息環境の保全が望ましい。

【引用文献】 石井（2005）／西垣・川道（1996）／矢竹（2002）／矢竹・田村（2001）／矢竹ほか（2005，印刷中）

【写真】 1997年、野田市／矢竹一穂

（落合啓二）



ニホンリス

## C ニホンアナグマ 食肉目 イタチ科

*Meles anakuma* Temminck, 1844国：掲載なし  
千：C-D-C

【種の特性】 千葉県産のオスでは頭胴長57-62cm、尾長11-14cm、体重4.8-8.2kg、メスでは頭胴長51-64cm、尾長9-13cm、体重3.3-10.9kg（落合，2002b）。森林性で、林縁や農耕地も好む。主にミミズ、果実、甲虫類を食す。夜行性だが、日中も活動する。地中に長いトンネルを掘り、巣穴として利用する。春に1-4頭の子を出産する。行動圏の面積は5-407ha（Kaneko，2009）。ニホンアナグマはユーラシア北部に広く分布する *M. meles* の亜種とされてきたが、近年は独立種とされるようになった（Kaneko，2009）。

【分布】 本州～九州。

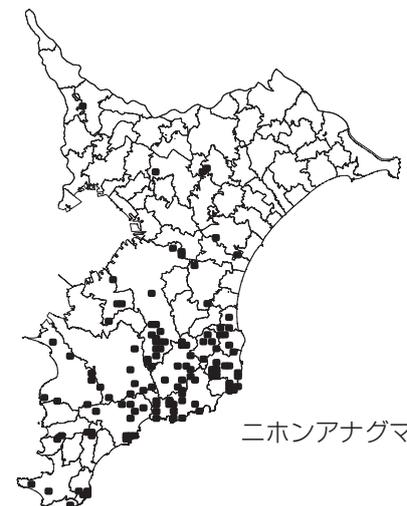
【県内の状況】 県南部に多く生息し、この地域では斃死個体の確認も少ない（落合ほか，2008）。県央・北部では分布域が縮小していると考えられるが、詳細は不明である。狩猟獣であり、近年（2003-2007年度）では年に5-9頭が狩猟捕獲されている。タヌキ、ニホンテン、ハクビシと食性が大きく重複する（松尾ほか，2007）。

【保護対策】 特に、県央・北部の生息状況の把握と生息環境の保全が望ましい。

【引用文献】 Kaneko（2009）／松尾ほか（2007）／落合（2002b）／落合ほか（2008）

【写真】 2004年、君津市／大木淳一

（落合啓二）



ニホンアナグマ

## D ニホンジネズミ 食虫目 トガリネズミ科

*Crocidura dsinezumi* (Temminck, 1842)

国：掲載なし  
千：D-D-D

**【種の特性】**頭胴長6.1-8.4cm、尾長3.9-5.4cm、体重5-12.5g(Motokawa, 2009)。細長い足、長い尾など体型はネズミ類に似るが、顔面は鼻先が細長く突き出し、食虫目の特徴を示す。河川の土手、水辺、農耕地・人家周辺のやぶなどに生息する。主に昆虫類、クモ類、ムカデ類を食す。出産期は4-10月で、1産1-5子(Motokawa, 2009)。地表に置いたネズミ用の捕獲器で捕獲される(五十嵐, 2002)。

**【分布】**本州~九州、周辺島嶼。移入個体群が北海道と韓国済州島に分布。

**【県内の状況】**海岸から山間部に至る広い範囲に生息するが、一般的に生息数は少ない(五十嵐, 2002)。千葉県立中央博物館の記録によれば、千葉市内でも3例の死体回収例がある(1995年と2010年に緑区土気、1996年に中央区星久喜町都市緑化植物園)。断片的に捕獲記録が報告されているだけで、県内の生息状況の詳細は不明である。

**【保護対策】**生息状況の把握が望ましい。

**【引用文献】**五十嵐(2002) / Motokawa(2009)

**【写真】**1991年。木更津市/千葉県立中央博物館所蔵標本

(落合啓二)



## D ヒミズ 食虫目 モグラ科

*Urotrichus talpoides* Temminck, 1841

国：掲載なし  
千：D-D-D

**【種の特性】**頭胴長8.9-10.4cm、尾長2.7-3.8cm、体重14.5-25.5g(Ishii, 2009)。アズマモグラより小さいが、尾は本種の方が長い。前足はモグラ類ほどには大きく発達していない。森林、やぶ、草地に生息する。モグラ類の優勢な平地には少ない。主に昆虫類、ミミズ類、ジムカデ類、クモ類、種実を食す。落葉層、腐植層を利用し、半地下性の生活を送る。昼夜ともに活動するが、地上での活動は夜間に多い。出産期は春で、1産1-6子(通常は3-4子)。非繁殖期の行動圏の面積は500-2,000m<sup>2</sup>(Ishii, 2009)。

**【分布】**本州~九州、周辺島嶼。

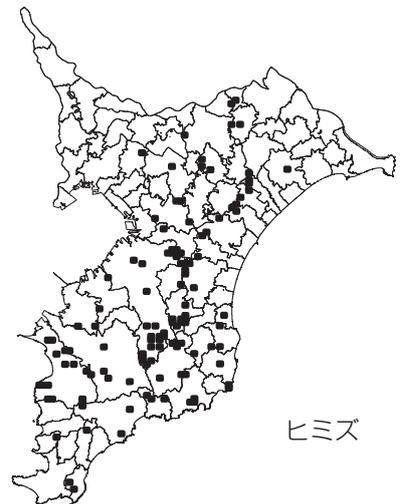
**【県内の状況】**県南部の森林に多く生息する。県央・北部では生息環境が悪化していると考えられるが、詳細は不明である。東京大学千葉演習林において、繁殖活動(Ishii, 1982)および社会構造(Ishii, 1993)の詳細な研究が実施されている。同地域における生息密度は7-13頭/haほど(Ishii, 2009)。

**【保護対策】**特に、県央・北部における生息状況の把握と生息環境の保全が望ましい。

**【引用文献】**Ishii(1982, 1993, 2009)

**【写真】**1990年。夷隅町/千葉県立中央博物館所蔵標本

(落合啓二)



## D ユビナゴコウモリ 翼手目 ヒナコウモリ科

国：掲載なし  
千：C-D-D*Miniopterus fuliginosus* (Hodgson, 1835)

【種の特性】前腕長45-51mm、頭胴長59-69mm、尾長51-57mm、体重10-17g（前田，2005）。高速・長距離飛行に適する狭長型の翼を持つ（船越・入江，1982）。洞穴（自然洞、廃坑、トンネル跡、防空壕跡、地下水路など）をねぐらとする。飛んでいる昆虫類を食す。夜行性。冬眠する。1産1子。秋～春は雌雄が群生するが、初夏にメスだけの集団で出産哺育する（Sano，2009c）。

【分布】本州～九州、いくつかの島嶼。アフガニスタン～インド・中国。

【県内の状況】鋸南町の鋸山の洞穴では1960年前後に15,000-50,000頭が越冬していたが、1980-1982年には確認されなくなった（鈴木，1983）。夷隅郡の洞穴では7月ごろに1,000頭ほどが確認される（千葉県立大原高等学校生物部，1985；大藪，1994，2002）。1990-2004年に実施された調査では、洞穴性コウモリの利用ねぐら42カ所のうち26カ所（県南部19、県央・北東部7）で確認され、うち13カ所で100頭以上が確認された（三笠ほか，2005。この調査には前述の夷隅郡の洞穴は含まれていない）。安房郡のトンネル跡では越冬期に約50,000-83,000頭と活動期に16,000頭が、山武郡の地下軍事工場跡では活動期に2,400-5,900頭が確認された。直線距離で約67kmあるこの2地点間で個体の移動が確認されている（繁田ほか，2005）。房総地方特有の「川廻しトンネル」がねぐらとして多く利用されている（三笠ほか，2005）。

【保護対策】ねぐらとして利用されている洞穴と周辺環境の保全が望ましい。集団性が高いため、利用個体数の多いねぐらの保全が重要である。

【引用文献】千葉県立大原高等学校生物部（1985）／船越・入江（1982）／前田（2005）／三笠ほか（2005）／大藪（1994，2002）／Sano（2009c）／繁田ほか（2005）／鈴木（1983）

【写真】2002年。山武郡／繁田真由美

(落合啓二)



ユビナゴコウモリ

## D カヤネズミ 齧歯目 ネズミ科

国：掲載なし  
千：C-D-D*Micromys minutus* (Pallas, 1771)

【種の特性】千葉県産の12月の捕獲個体 ( $n=65$ ) では、頭胴長 $61.43 \pm 6.69$ mm（最小51.50mm、最大84.00mm）、尾長 $73.78 \pm 8.24$ mm（最小58.83mm、最大99.30mm）、体重 $6.79 \pm 1.84$ g（最小4.50g、最大12.50g）（黒江，未発表資料）。主に放棄水田、河川敷、湿地などの草原に生息する。ススキ、オギ、チガヤなどイネ科の葉を利用し、主に地上70-110cmのところ直径10cmくらいの球形の巣を作る。主にイネ科植物の種子やバッタ類を食す。

【分布】本州（北部を除く）～九州。ヨーロッパ～東アジア。

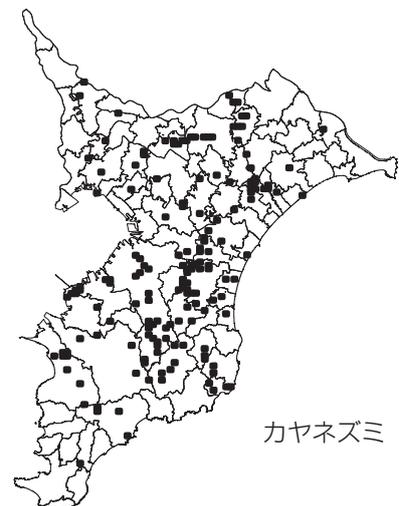
【県内の状況】丘陵地から平野まで広く分布する。イネ科などが繁茂する草原に生息する。九十九里平野における出産期は5-12月で、平均産子数は4.3頭（最小2頭、最大8頭、 $n=56$ ）であった（黒江，未発表資料）。同地域で、本種の移動分散や分布に及ぼす景観構造の影響について詳細な研究が実施されている（Kuroe et al., in press）。

【保護対策】生息状況の把握と生息環境の保全が望ましい。河川敷の草刈りを行う際に本種の繁殖時期への配慮が望ましい（澤邊ほか，2005；Hata et al., 2010）。

【引用文献】Hata et al. (2010) / Kuroe et al. (in press) / 澤邊ほか（2005）

【写真】2007年。白子町／黒江美紗子

(落合啓二)



カヤネズミ

## D ヒメネズミ 齧歯目 ネズミ科

*Apodemus argenteus* (Temminck, 1844)

国：掲載なし  
千：C-D-D

【種の特性】 頭胴長6.5-10cm、尾長7.0-11cm、体重10-20g (Nakata et al., 2009)。森林に生息する。主に種子、緑色植物、果実、昆虫類を食す。夜行性で、樹上をよく利用する。1産1-9子（通常は3-5子）であり、出産期は寒冷地で4-10・11月、温暖地で10-3月。行動圏の面積は200-1,325㎡ (Nakata et al., 2009)。

【分布】 北海道～九州、おおむね面積150km<sup>2</sup>以上の周辺島嶼(金子, 2005)。

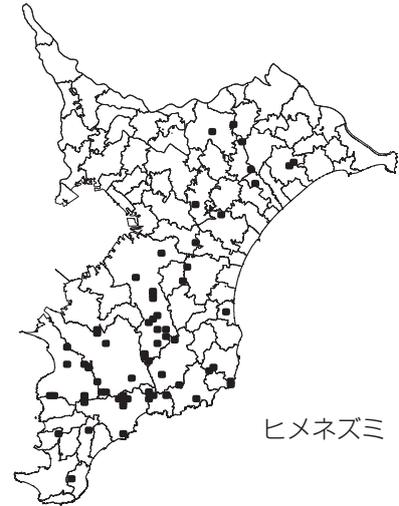
【県内の状況】 房総丘陵の森林、特に照葉樹林を好み、県央・北部では社寺林など限られた場所で確認されるだけである(濱中, 1998; 五十嵐, 2002)。清澄山における研究では、出産期は春(2-4月)と秋(9-11月)の2回、平均産子数は4.1頭、生息密度は5.6-23.0頭/haであった(西方, 1979)。

【保護対策】 特に、県央・北部における生息状況の把握と生息環境の保全が望ましい。

【引用文献】 濱中(1998) / 五十嵐(2002) / 金子(2005) / Nakata et al. (2009) / 西方(1979)

【写真】 1998年。市原市/田辺浩明

(落合啓二)



ヒメネズミ

## D ニホンテン 食肉目 イタチ科

*Martes melampus* (Wagner, 1840)

国：長崎県対馬に生息する亜種 *M. m. tsuensis* は絶滅危惧Ⅱ類 (VU)  
千：C-D-D

【種の特性】 メスよりオスの方が大きい。千葉県産のオスでは頭胴長41-46cm、尾長20-23cm、体重1.5-1.6kg、メスでは頭胴長40cm、尾長17cm、体重0.9kg (落合, 2002b)。広葉樹の自然林を好む。主に果実、昆虫類、鳥類、小型哺乳類を食す。夜行性で、樹上をよく利用する。春に2-3頭の子を出産する。行動圏の面積は70-230ha (Masuda, 2009)。千葉県産の本種では、夏毛は全身が黒褐色で、喉から胸が鮮やかな黄色、冬毛は全身が薄い褐色の個体が多い (落合, 2002b)。

【分布】 本州～九州。移入個体群が北海道南部に分布。

【県内の状況】 主に房総丘陵に生息する。斃死個体の確認数は、タヌキ、ニホンイタチ、ニホンアナグマと比べて少ない (落合ほか, 2008)。狩猟獣であり、近年(2003-2007年度)では年に0-4頭が狩猟捕獲されている。タヌキ、ニホンアナグマ、ハクビシンと食性が大きく重複する (松尾ほか, 2007)。

【保護対策】 生息状況の把握と生息環境の保全が望ましい。

【引用文献】 Masuda (2009) / 松尾ほか (2007) / 落合 (2002b) / 落合ほか (2008)

【写真】 1992年。市原市/田辺浩明

(落合啓二)



ニホンテン

**D スナメリ 鯨目 ネズミイルカ科***Neophocaena phocaenoides* (G.Cuvier, 1829)国：掲載なし  
水産庁：希少  
千：無-D-D

**【種の特性】** 背鰭のない小型ハクジラ。性成熟体長は132-151cmであり、日本産の個体の最大体長は175cmから200cmを越す (Shirakihara, M. and Yoshioka, 2009)。水深50mより浅く、海底が岩盤でない海域を好む。主に魚類、頭足類、エビ類を食す。通常は2-4頭の小グループであるが、ときに百頭を越すグループが観察される。出産期は海域で異なり、瀬戸内海・太平洋沿岸域では4月をピークに春から夏にかけて出産する (白木原, 1996)。1産1子で、通常2年に1回出産する。

**【分布】** 5海域 (仙台湾~東京湾、伊勢湾・三河湾、瀬戸内海~響灘、大村湾、有明海・橋湾) に非連続的に分布する (Shirakihara, K. et al. 1992)。日本からペルシャ湾にいたる温暖な沿岸海域といくつかの大河。

**【県内の状況】** 銚子沖や九十九里海岸でよく目撃される。東京湾内でも死体の漂着や生体の目撃が報告されている。

**【保護対策】** 水産資源保護法の捕獲禁止対象種に指定されている。生息状況の把握と生息環境の保全が望ましい。

**【引用文献】** Shirakihara, K. et al. (1992) / Shirakihara, M. and Yoshioka (2009) / 白木原 (1996)

**【写真】** 2010年。銚子市外川地先 / 坂東俊輝

(落合啓二)

**情報不足 ヒナコウモリ 翼手目 ヒナコウモリ科***Vespertilio sinensis* (Peters, 1880)国：掲載なし  
千：無-情報不足-情報不足

**【種の特性】** 前腕長47-54mm、頭胴長78-80mm、尾長35-50mm、体重14-30g (前田, 2005)。樹洞、建物、洞穴、岩のすき間をめぐらとす。飛んでいる昆虫類を食す。夜行性。冬眠する。1産1-3子。春~夏に数十頭~数千頭のメスだけの集団で出産哺育する (Fukui, 2009b)。

**【分布】** 北海道~九州。中国、モンゴル、シベリア東部、朝鮮半島、台湾。

**【県内の状況】** これまで4例が確認されている：市川市幸 (2002年11月10日：千葉県行徳野鳥観察舎の記録)、鴨川市東町 (2003年3月1日：浅田ほか, 2005)、浦安市高洲 (2004年10月14日：千葉県行徳野鳥観察舎の記録)、千葉市中央区千葉寺町 (2007年12月2日：千葉県立中央博物館所蔵標本CBM-ZZ 5796)。千葉県行徳野鳥観察舎の2例はコウモリ類の専門家による同定ではないが、鳥獣に精通している者の同定であること、黒っぽい体毛に白い刺毛が多数混じっていたという特徴、および次に示す計測値より間違いないものと考えられた：2002年の市川市産個体は前腕長49mm、体重17.5g；2004年の浦安市産個体は前腕長50.8mm、体重18.5g。

**【保護対策】** ねぐらの確認調査、およびねぐらが確認された場合はその保全が望ましい。

**【引用文献】** 浅田ほか (2005) / Fukui (2009b) / 前田 (2005)

**【写真】** 2008年。千葉市 / 千葉県立中央博物館所蔵標本  
(注：上記のこの個体は2007年12月に救護され、飼育後、2008年1月に死亡した。)

(落合啓二)



ヒナコウモリ